

5-6 気候変動による高山植生及び希少植物への影響調査

大項目	小項目	チェック	チェック項目	備考
影響予測手法 及び予測結果	(影響予測手法) 現況の再現性		現況を再現できている	植生分布モデルの正答率は、主たる植生である落葉広葉樹林と常緑広葉樹林については80%を上回っているが、希少植物の予測に関しては手法的に再現性の検証が不可能であり、不確実性が残っている。
		○	現況を概ね再現できているが、一部現況の再現が困難な点があった	
			現況再現を実施していない	
	(影響予測手法) 他地域での応用可能性		気候シナリオを入れ変えれば、他地域でも実施可能	希少植物の予測については、希少植物の現在の生育状況に関する情報整理が必要である。
		○	気候シナリオに加え、他の入力データを入れ換えれば、他地域でも実施可能	
			本調査の対象地域のみ利用できる	
	(影響予測手法) 応用に必要な技術レベル		多くの行政担当者が自ら実施可能である	予測モデルを使用するためのプログラミング技術と計算能力の高いコンピュータが必要である。
		○	気候シナリオや影響予測モデルを扱うことができるコンサルタントや研究者のサポートが必要	
			研究者等の指導の下でなければ実施は難しい	
	(影響予測結果) 活用可能性		行政の活用の観点から、妥当と思われる予測結果が得られた	今回目的としていた広域的な予測評価は達成できた。ただし、個々の希少植物種を対象としたきめ細かな予測が別途望まれる。
			概ね妥当な結果と考えられ、行政で活用が可能であるが、さらに検証を実施することで、より精緻な予測結果が望める	
		○	行政で活用するためには、引き続き調査やデータ収集などが必要	
適応オプション	適応策の妥当性		革新的な適応策を提示できた	保護区を含む自然林における植生管理や自然林の下部に広がる人工林の利用など、具体的手法を整理した。予測結果等の空間データは整備できたため、今後、地域に落とし込んで実施箇所を検討する必要がある。
			影響予測結果に対応した適応策を提示した	
		○	影響予測結果と必ずしも一致しないものも含め、分野の一般的な適応策の提示を行った	
	導入可能性		他地域で実施・導入が可能である	上記のとおり追加の調査が必要であり、植生や希少植物の生育状況など対象地域の特性に応じた適応策を検討する必要がある。
			本調査の対象地域でのみ実施・導入が可能である	
		○	本調査の対象地域で導入するには、さらなる調査、検討が必要である	
	他分野との関連性		他分野に相乗効果や副次効果が生じる	人工林の伐採による広葉樹林化などは、一時的に森林の防災機能低下を招くおそれがあるため、適応策実施箇所などに留意が必要である。
			対象分野のみに効果がある	
		○	他分野にマイナスの影響を与える可能性があるため、導入の際に留意が必要である	
	適応策の多様性		適応オプションを多様な視点から5つ以上提案できた。	植生保全として、将来不適地における現状保全、将来適地における現状保全、人工林等の改善の3つの視点から5つの適応オプション、希少植物種を対象とした適応策として2つの適応オプションを提案した。ただし、いずれも保全面からのアプローチであり、産業や観光面などからのアプローチまで至っていない。
		○	適応オプションを5つ以上提案できたが、調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られていた	
			調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られたため、提示できた適応オプションも限られた	

(※1) 現況の再現性とは、現在の状況を予測モデルが再現できている度合いのこと。通常、将来予測を実施する前に、モデルの妥当性を確認するため、現在の観測値等を利用して、予測モデルが現在の状況を再現できているか確認している。